

ゴーゴーミニスカート

〜上京ものがたり〜 (仮)

脚本 大岡俊彦

原作 西原理恵子

「上京ものがたり」

「女の子ものがたり」

(小学館刊)

登場人物

なつみ (20)

きいちちゃん (20)

なつみのともだち。

みさちゃん (20)

なつみのともだち。

和哉 (25)

なつみの東京の彼氏。

杏子 (30)

ミニスカ嬢。ヤンキーの姉御肌。

レイコ (27)

ミニスカ嬢。

店長 (42)

ミニスカクラブ「ベリーショート」店長。

白石 (28)

大手出版社の女性編集者。

根津 (35)

弱小エロ出版社の編集者。

島田 (40)

常連客。巨漢のダンブ運転手。

渡辺 (50)

常連客。しよぼい独身おやじ。

小野寺 (28)

常連客。サラリーマン。

母 (32、46)

なつみの母。

祖父 (60)

厳格な田舎の祖父。

葵 (19)

ミニスカ嬢。とてつもない美人。

豊田 (20)

田舎にいた頃のなつみの彼氏。

タカくん (17)

田舎のヤンキーの束ね役。

なつみ (6)

なつみ子役。

きいちちゃん (6)

きいちちゃん子役。

みさちゃん (6)

みさちゃん子役。

青山 (26)

青山の美容師。

花島 (22)

少女漫画家。

栗岡 (33)

小野寺の取引先の担当。Sっぼい。

○クラブ「ベリーショート」内

なつみ「……」

淡いブルーの壁にもたれて一人不安そうになつみ(18)。真赤なミニスカートの衣装を着ている、というよりは衣装に着られている。裾を引っぱって、太腿を隠そうとしている。

クラブ「ベリーショート」は開店準備中。あわただしくボーイ達が床掃除やテーブルセッティングをしている。店内はポップで落ち着いたオシャレさ。田舎者のなつみはそのオシャレさに気後れしている。開店を待つ周囲のミニスカート衣装の先輩ミニスカ嬢達は、なつみよりずっとあかぬけていて、それが更になつみの孤独を際立たせている。

なつみ「(独り言)……こういう時は、あてっこをするとい」「うつむいた床には、自分の影が二重に出来ている。なつみ「(独り言) ふたりは何に見えますか。にわとりさんと、カエルさん。ふたりは仲良しですか。それともかじりあいをしますか」

ふたつの影が、にわとりとカエルの形になり(CG)、ケンカとも仲直りともとれるじゃれあいをはじめ。その現実逃避ににこりとするなつみ。
なつみN「昔から、私には妄想癖がある」

○田舎、野原(回想)

緑の野原。それは田舎の、工場の隣の空き地。子供の頃のなつみ(6)が、車座になったきいちゃん(6)、みさちゃん(6)、他友達に話を披露している(以下、田舎パートは関西弁か土佐弁)。

なつみ「じゃ次は大丸のホットケーキの話しようか」
きいちゃん「待ってましたっ!!(拍手)」
なつみ「大丸の屋上のホットケーキはな、幸せのホットケーキな
んや」

みさちゃん「ど、どんな味がすんの？」

なつみ「あつつまーい。ケーキも二重なら、バターも二重」
きいちゃん「うんうん」

なつみ「ハチミツがたっぷりかかって、とろーっとバターとまざって…」

みさちゃん「うんうん！」

なつみN「本当は、私は大丸なんかに行けるほどのお金持ちじゃない。だからこの話はぜんぶ私の妄想。つくり話だ」

みさちゃん「ええなあなっちゃん、親に大丸連れてつてもろて」
なつみ「そうや。私は愛されてるんや。みんなももうすぐ食べれるで。あまーい、あつまーい…」

なつみN「でも私のつくり話は、みんなの目を輝かせる。みんなの中で、そのときその話は、あつたことになる」

目をつぶってホットケーキの甘さを想像する子供たち。得意げななつみ。そのうち、ホットケーキがみんなの中央に浮いている(合成)。

○(元に戻り) クラブ「ベリーショート」内

現在のなつみは、まだ床の影で妄想している。カエルがにわとりに勝った。

目をあげると、あかぬけた先輩たちが自分を見ている。愛想笑いをするなつみ。先輩たち、再び雑談に戻ってなつみはその輪に入れない。

衣装のミニスカートの裾をめいっばいのぼして、恥ずかしそうに太腿を隠す。

なつみ「決意…できるだけ早く、この店を辞めなくては」

○東京上空

ゴミゴミしている東京の街の空撮。だんだん近づいてくる街並。それは上京してくるなつみの目線。

なつみN「今までの人生、脇役ばかりで目立たない人間ほど、いつかどこかで主役になりたくて一発逆転を狙う。毎年、春

になると何万もの若者が東京にやってくるのは、お金を稼
ぎたいとか夢を叶えたいからじゃなくて、人生の主役にな
りたいからじゃないかと私は思う」

○野原（回想、つづき）

男の子「野球やろーぜ！」

野原でなつみの話を聞いていたみんな、急に野球に
興味がうつって走っていく。

なつみ、きいちゃん、みさちゃんは取り残される。

○飛行機内

東京の街を見るなつみの横顔。

○東京の街、たとえば表参道

上京してきたばかりのなつみは、スケッチブック
一冊を抱えて東京の街を歩く。大切にもっているス
ケッチブックはボロボロで、表紙にまで絵がはみ出
している。

周りを歩く東京の人たちはみんな雑誌から出てき
たモデルのようにキレイな男女たち。オープンカフ
エで談笑するセレブラしき人。

なつみN「東京に来て最初に気づいた事は、私がこの日のために
用意したお気に入りのクツや洋服ぜんぶが、ものすごくか
っこ悪かったことだ」

なつみ、周囲を見渡す。カメラ、なつみの周りを
一周する。周りの街は、表参道、渋谷、六本木、銀
座、新宿、お台場などが合成された「東京」という
街。情報量の多さに圧倒されるなつみ。周囲を歩く
人にぶつかりそうになる。

背景は一周して元に戻ってくる。ダサい長いスカ
ートを気にして、「東京」に気後れするなつみ。そ

の横を、華やいだミニスカートの女の子たちが通り過ぎる。

○タイトル

「ゴーゴーミニスカート　〜上京ものがたり〜　〔仮〕

○海をゆくフェリーの上

タイトル『13年前、K県』

風にふかれて海を見たままの母。

自分のふたつの影で妄想遊びしていたなつみ（6）、
気を使って母に話しかける。

なつみ「お母さん、ねえ、お母さん。わたしね、おかあさんのお腹のなかにいた時のこと覚えてるのよ。わたしお腹におった時ね、お母さんノリ好きやったやろ。わたしお母さんの食べたノリ、おフトンにしてお腹の中でねてたのよー。こーやって、おスシみたいにな」

母「…（海を見たまま）」

○田舎、なつみの祖父の家

祖父の家に引越してきたなつみ、母。

祖父はずっと機嫌が悪い。母、祖父に三つ指ついて

母「しばらくお世話になります。家が狭くなってますみません」

祖父「この出戻りが。挨拶はええからさっさと荷物片付けや」

×

×

×

引越し荷物の片付け中。

なつみ「お母さん、そんでな、そんでな、実はお腹から出てきた
シュンカン、」

母「なっちゃん、だまって」

なつみの顔から笑顔が消える。

母「うそばかりゆうてないで外であそんで！」

○野原

工場の横の汚い空き地に、ぼつんと一人立ちつくしているなつみ。黒猫が寄ってくる。抱き上げる。

きいちゃん「どこのこ？」

汚いきいちゃん（6）、みさちゃん（6）が声を掛ける。

みさちゃん「ねえ、どこのこ？」

なつみ「…」

きいちゃん「それ、うちの原っぱでひろうた猫やろ」

みさちゃん「そしたらうちの猫やし」

きいちゃん「さわらしてや」

黒猫をなつみから奪うきいちゃんとみさちゃん。

みさちゃん「あかんあかん。あんた抱き方がへたや。赤ちゃんみ

たいにすんの。こつっ、こつっ」

きいちゃん「やめてや。あたし抱いてんのに」

黒猫は元気がない。

みさちゃん「そや。牛乳あげんと！」

走り出すみさちゃん。なつみときいちゃんも続く。

○団地、玄関先

みさちゃんのお母さん「何考えてんの！　うちは団地なんよっ！

もとにすてて来なさいっ」

怒るお母さんの奥に、みさちゃん家が垣間見える。

フルチンの弟とエッチなポスターが見える部屋。

きいちゃん「（なつみに耳打ち）みさちゃんのお父さん、すけべ

えなんやで」

○藪の中の一軒家

留守の家を、靴のままずかずかと上がってくるみさちゃん。
ちゃん。

きいちゃん「ちよつとみさちゃん、クツぬいであがつてや」

みさちゃん「きいちゃんち汚いもん。クツ下よこれたらおかあちやんにしかられるもんっ」

ほこりっぽくて古い田舎式の台所。何に使うのか分からないものがたくさん積み上げてある。

みさちゃん「なつみに耳打ち」ニコラへんの子はみんなきいち

やんちにあがるの禁止やの。またないから」

きいちゃん「汚い冷蔵庫をあけて」あかん牛乳なんてそんなシ

ヤレたもんないわ」

○野原 夕暮

元気のない黒猫は、箱の中に入れられて藪の奥。

きいちゃん「そしたら決まりっ。あしたは早起きして家のごはん

もってくる」

なつみ「夕ごはんもでけるだけでもってくる！」

みさちゃん「猫はにげんようにハコに入れてかくすっ！」

○野原(次の日)

野原に走ってくるなつみ。

箱を囲んで立ちつくすきいちゃん、みさちゃん。

なつみ「死んでんの？」

みさちゃん「くろねこはたたるって、おばあちゃんがゆうてたわ

っ」

きいちゃん「はよう、埋めよう、はよう」

なつみ、動かない黒猫に触る。

×

×

×

スコップで埋めて、黒猫の墓完成。拝む三人。

きいちゃん「…せっかくおもしろいことになると思ったのに」

みさちゃん「…」

なつみ、つくり笑顔で、

なつみ「ねえ、大丸のホットケーキって食べたことある？」

みさちゃん「大丸ってあの金持ちしか行かれへんデパートか！」

きいちゃん「入り口で服装検査されて、あかんかったら殺され

るー」

なつみ「そのとおり」

きいちゃん「そのホットケーキ食べたんか！」

なつみ「食べた」

みさちゃん「ど、どんな味や」

なつみ「あまい」

きいちゃん「あまいんか！」

なつみ「それが今まで食べたどんな味より甘い。まさに幸せの味」

みさちゃん「どんだけあまいんや！」

なつみ、はじっこの木から木まで走る。

なつみ「こんにちは…ぐらいあまい」

きいちゃん、みさちゃん「ええなあああ（よだれ）」

なつみ「ああ…バターにハチミツがもうたつぷりで、とろっと溶

けて混ざってて」

きいちゃん「うんうん」

なつみ「バターが二重でケーキも二重」

みさちゃん「うんうん！」

いつまでも黒猫の墓の前で話している三人。

なつみN「ずっと、ドキドキしていた。はじめてころした猫。は

じめての葬式。はじめての友達」

○なつみの家、寝室、夜

口論する祖父と母。

母「もうちよつと小さい声でお願いします。なつみが起きてきます」

祖父「声のことまでお前に言われとおない。だいたい出戻りのバカ女がなにを偉そうなことを…」

なつみ、気づかれないように布団の中から見ている。

なつみ「こういう時は、呪文をとなえるといい。私はしあわせ。

私はしあわせ。私はしあわせ」

母と祖父の声が無音になる。

口をばくばくさせて喧嘩している祖父と母。

なつみ「フフフ。おもしろい顔。魚みたい。私はしあわせ。私はし

あわせ。私はしあわせ」

○なつみの家、縁側（翌日）

海が見える縁側で、真剣に絵を描いているなつみ。
かかれてゆく海の絵。

なつみ「しろいかみのまん中に線をひいたら、上はそらで、下は
うみだ。その色とうみの色はおなじ青じゃない。その
むこうとうみのむこうもかく。

けしきはぜんぶちどりがいないから、色だけでかく。む
こうとこっちはあいだに空気があるだけなのに、色がちが
っているから、それもかく」

祖父がやってくる。絵を覗き込む。

祖父「おまえはなんか変わったもんをもつとる。特別な人間か
もしれん。なつちゃんの親父さんがよういうとつたで」

大きな手で頭をなでる祖父。なつみ、うれしくても
う一枚描こうとする。

祖父「もう一枚描きよるか。次はなんぞい」
なつみ「きてなんでしよう」

得意げななつみ、うれしそう。

○スケッチブックのアップ

次々と描かれてゆく絵（たとえば、巨人の腹の中に
宇宙と地球と亀、にゆうにゆうさん、まっすぐのび
る道と女の子とホンコン）。とくに上達する訳では
なく、「味のある絵」方向である。

○野原、10年後

その絵から顔をあげるなつみ（16）。高校生であ
る。茶髪。ボロボロのスケッチブックは、表紙にま
で絵がはみ出している。

なつみ「え？なんて？ 聞いてなかった」

脇に立っているのは高校生のきいちゃん、みさちゃん。きいちゃんは金髪のヤンキー。みさちゃんはやりにすぎのパーマで、厚化粧に余念がない。

みさちゃん「なつみ、聞いてなかったんか（と遠くを指さす）」
きいちゃん「タカくんや（恋する乙女調）」

ゆっくり走る改造スカイラインに乗ったヤンキー、タカくんが、それ以上にゆっくり歩くじいさん相手にクラクションを鳴らしている。

タカくん「引き殺すぞオラー……!!」

じいさん道をあける。後輩ヤンキー達の改造バイクが後につづく。一般高校生も避けて通る。

きいちゃん「ここで一番といえばヤンキーのタカくんや」

みさちゃん「一般の男子はみんなビビっとるらしいで」

きいちゃん「あんな彼氏おったら、ウチら守ってくれるかなあ」

思いきり背のびして手を振るきいちゃん。

タカくん、手を振り返す。

きいちゃん「見た？見た？両思いかな!？」

なつみ「いや、またちがうと思う」

○なつみの部屋

鏡の前に化粧するなつみ。壁には少年サンデーから切り抜いたゆうこりん（アイドル小倉優子）のポスター。黒髪ストレートの髪型とメイクで、ゆうこりんになるうとしている。笑顔もマネしつつ。

なつみ「え？ここに線を引けばいいの？いや、やっぱやめて、

いつものやり方で…」

車のクラクションが呼んでいる。

○なつみの家、外

クラクションの主は白い車の善良な彼氏、豊田（20）。あわてて出てくるなつみはブリブリのアイドル服。

庭掃除していた隣ののりこが声をかける。

のりこ「アラなっちゃんデート？ 素敵ねその服」

なつみ「(見られた) スイマセン似合わなくて」

豊田「似合ってるよなつみ。ゆうこりんそっくりだ」

なつみ「…(あまりそっくりではない)」

のりこ「大学生とおつきあいなんて、なっちゃんも大人ね。(豊

田に) あんまり遅くまで連れ回さないでね」

豊田「ハイ。じゃいこうか」

○走る車の中

爆音でゆうこりんの「永遠ラブリン」をかける豊田

はノリノリ。すっごいつまらなさそうなたつみ。彼

が微笑むと、あわてて練習した笑顔で返す。

○きいちゃんの部屋、夕方

相変わらず汚い家だが、女の子っぽくヤンキーっぽく内装を工夫してある。煙草をふかすきいちゃん。

きいちゃん「いらっしやーい」

なつみ、ドツカと(女の子らしくなく)座って、き

いちゃんの煙草を横取り。

きいちゃん「だいぶ似てきたやんかゆうこりに」

なつみ「そうなのゆうこりんはコリン星のお姫さま…なんか似てるかつ！ けっこうコレもあつついねん！」

黒髪ストレートのウィッグを外して床に投げ捨てる

なつみ。下から茶髪があらわれる。

なつみ「私は優子とちゃうねん、なつみやねん。なんであんな男

とつきあってるんやろ」

きいちゃん「こっちが聞きたいわ。大学生なんかよりヤンキーの

方がこの街では偉いと思うで」

なつみ「(ムツとする) そんなことはないやろ」

二人が対立しようとしたとき、バーンとドアがあいてみさちゃんが入ってくる。

みさちゃん「ヤッてきたー！ 男とはじめてヤッてきたでー！」
なつみ以上に下品に座るみさちゃん。

なつみ「みさちゃん、ヤッたって」

みさちゃん「駅前で男にナンパされて、ホテル入って、ヤッて、
バイバイでおしまい。たいした事なかったわ！ ガハ

ハ！」

なつみ「みさちゃんその傷」

目の上に青タン。

みさちゃん「親に無断で外泊したしな、おもくそ殴られて、でケ
ンカして家出してここに来た」

きいちゃん「ちよう待って湿布あるで」

みさちゃんに湿布を貼ってあげるきいちゃん。

きいちゃん「男とつきあうってどんな気分？…」

みさちゃん「なんか即物的」

なつみ「せのびしまくり」

きいちゃん「楽しいの？」

二人とも首をひねる。

きいちゃんのケータイが鳴る。着メロを聞いてとび
つききいちゃん。

きいちゃん「もしもし！ タカくん！ ドライブ？ いくいく！

いつもの。うんわかった！（電話を切り、二人に）な、

タカくんが真夜中のドライブ行こうって。友達も連れてお
いでって」

○駐車場、深夜

うすぐらい駐車場に、タカくんの車とヤンキー達集
結。なつみ達三人、そのそばに。

タカくん「よし、お前ら、見張りに立て」

へぼい後輩達、さっと見張りに立つ。

タカくん「きいちゃん、一番だいたいな役目やで」

きいちゃん、ホースを持ってさっと出す。

タカくん、そのホースを他の車のガソリン口に入れ
て、スーッと吸う。すかさず自分のスカイラインの

ガソリン口へ。ガソリンはホースを伝ってスカイラインへ（つまりガソリンを盗んでいる）。

きいちゃんはそんなタカくんを見つめ続けている。

タカくん「よしみさちゃんとなつちゃんは後ろに乗り」

なつみ、みさちゃんは後部座席。きいちゃんは外で

ホース持って立ったまま。

タカくん「きいちゃん、ホース持ってて」

きいちゃん「わかった。ホースもつとく」

なつみ「ん？」

車、発進。

○タカくんのスカイライン、車中

タカくと助手席の後輩は矢沢（か尾崎）を爆音で

かけて歌っている。後方にはバイク部隊。

なつみ「止めて。私、帰る」

タカくん「あ？」

みさちゃん「なつみ」

なつみ「降ろして」

○路上、深夜

スカイラインから降りるなつみ、みさちゃん。

なつみ「フツー女の子は送ってく、っていうもんやろ！」

なつみ啖呵を切って歩き出す。みさちゃんついていく。

○駐車場、深夜

なつみ、みさちゃん戻ってくる。

きいちゃんはまだホースを持って立っている。

きいちゃん「アレ？ タカくんは？」

なつみ「帰ってこおへんよ。帰ろうよ」

きいちゃん「そんなん知ってるよ。ウチ、ここで待ってる」

なつみ「だから帰ってこおへんって」

きいちゃん「でも待ちたいねん」

なつみ「なんで?!」

きいちゃん「ウチの初恋やねん。ウチがタカくん待ちたいねん」

なつみ、無言で出口へ去る。

みさちゃん「なつみ! …きいちゃん、なつみもああ言うてるし」

ゴトリという音。出口の自販機で、あったかい缶コ

ーヒー一本を買ったなつみ、戻ってくる。

なつみ「一本を回しのみでええか? 夜は長いで」

きいちゃん「なっちゃん」

満天の星。三人は座って缶コーヒーを飲む。きい

ちゃんとみさちゃんは座って、なつみは一人立って。

三人「…」

きいちゃん「海へ行こう。3人でチャリンコ乗って海へ行こう」

○国道、深夜

3人はそれぞれの自転車に乗って、無言で海へ向かう。

○駐車場、深夜(さきほどの続き)

きいちゃん「ボトルに手紙入れる話、なっちゃん覚えてる?」

なつみ「ボトル?」

みさちゃん「ああ! 海に投げるとってやつ!」

○きいちゃんの部屋(回想)

まだ子供の頃の3人、車座に座っている。

なつみ「ある日、独りぼっちの女の子が、ボトルに自分の事を書

いて海に流すんや。そうすると、親友ができたんやて」

みさちゃん「親友?」

○なつみの話、童話風ダイジェスト

なつみの声「返事が海の向こうから来たんや。相手の女の子も独

りぼっちで、二人は真実の親友になる。二人はおばあさんになってもずっと親友」

きれいな女の子(外人)が海から現れてなつみの手を握る。童話風の高速ダイジェスト。

二人は卒業式の日も、お互いの結婚式の日も、おばあさんになっても、常に側にいる。

きいちゃん、みさちゃん「へえええ」

○駐車場、深夜(さきほどの続き)

みさちゃん「あん時は子供やったから海までよういかんかったけど、今やったらチャリンコでいけるやん」

なつみ「そやけど。…そんなん、まだ覚えてたん」

きいちゃん「ニコニコしている」行ってみようや」

なつみ「ボトルなんてないやん」

きいちゃん「アレ」

自販機のゴミカゴ。水(やお茶)のペットボトル。

○国道、深夜→夜明け

3人は自転車をこぐ。3人とも、空のペットボトルに手紙を入れている。

海が見えてくる。夜明けである。

○夜明けの海

次第に闇から明るくなっていく空。止められた3台の自転車。

波打ち際まで出て、3人はそれぞれの思いをペットボトルにこめて、できるだけ遠くへ投げる。

きいちゃん「流れてまえー！ 世界の端まで流れてまえー！」
なつみ「ここが世界の端っこや。私たちの世界はここつまりなんや」
みさちゃん「この向こうには、きっと私たちの事全部分かってくれる子がいると思う」

3人「……」

朝日。荒い波は。ペットボトルをいのように扱う。さ
まよう3つのペットボトルは今の3人である。
きいちゃんとみさちゃんは座り込んでいるけど、な
つみは一人立ったまま。背のびしてみる。
なつみの目には、水平線の向こうの東京が見えてく
る（合成）。

○駅のホーム

ドサリと置かれる大きいカバン。ボロボロのスケツ
チブックを胸に抱くなつみ。なつみは列車の中に入
り、彼氏の豊田はホームに残る。

豊田「今の今で実感わいてきたでオレ。ホンマに絵描きになり
に東京へいくんやなあ」

なつみ「ありがとう送ってくれて」

豊田「(言いにくそうに) オレら、まだ若いし、結婚とかはま
だ、なあ」

発車のベルが鳴る。

豊田「あ、今度いつ帰ってくるの？」

なつみ、つくり笑顔。ドアがしまる。

なつみN「列車のドアがしまった瞬間、私は彼の顔を忘れた。友
だちの顔も、家族の顔も忘れてしまった」

なつみ「もう帰らない」

○走る電車

○東京上空

○東京の街、たとえば表参道

オシヤレな人達の中で立ちつくすなつみ、表情が変わる。
なつみ「どうやってこの東京で成り上がっていくのか、考えるな
つみ」

○モニタージュ

美大で、たくさんの学生と並んで木炭デッサン。

× × ×

ウエイトレスのバイトをする。給料をもらう。

× × ×

画材屋で画材を買うと、その給料袋のいくらも残らない。

× × ×

クツ売りのバイトをするなつみ。

× × ×

清掃のバイトをするなつみ。

× × ×

しかし、画材屋でまた画材を買おうと、一向にお金が残らない。

× × ×

なつみのアパートの部屋。寂しくTVを見ながら、

公共料金支払い通知と小銭を見つめる。

○美大、デッサン室

黙々とデッサンにはげむなつみ、学生達。

隣の男が話しかけてくる。やせ形の無精髭を生やした、やさしそうな年上の男、和哉。

和哉「今年の新入生は変わった子が多いって聞くけど、きみは新入生？」

なつみ「ハイ」

和哉「(しげしげと見て) そうでもないね」

なつみ「私、変わった子ではないですか」

和哉「美人ってコトだよ(微笑み)」

なつみ「…」

和哉「どしたの？」

なつみ「東京の人はウソがうまいって聞いたけど、こーう言うんや」

○スーパー、夜

魚の棚の前で悩むなつみ。

なつみ「…3割引か。(時計を見て) 半額タイムまで待つか、し

かし半額になるような魚を食べるべきか」

隣に割り込んでくる、カゴに野菜を入れた和哉。

和哉「よう新入生。きみもこの界限に住んでんだ」

なつみ「あの、えっと」

和哉「(自分を指さし) 和哉。7年生」

なつみ「7年？」

和哉「(笑) もう1年の授業出んのかったるくって。で美人ち

ゃんは？」

なつみ「浦川です」

和哉「浦川、なに？」

なつみ「なつみ」

和哉「なつみ。いい名前じゃん。なつちゃん料理うまいの？」

なつみ「(指のバンソーコを隠し) あんまり」

和哉「じゃオレつくってやるよ。金からないコツ、7年分の

知識あるし(カゴの中を見せる)」

○なつみの部屋、夜

台所で手際よく料理する和哉。

和哉「オレずっと東京だからさ、なつちゃんみたいな方言聞くとキュンとすんだよね」

なつみ「そうですか？」

和哉「うん。…っと一丁上がり、132円。どう？」

なつみ「(一口つまんで、驚く) やるな」

×

×

×

居間のちいさな机に料理を並べ、お茶で乾杯。

部屋を見て、和哉は向かいの席からうつり、なつみの横に並んで座る。

なつみ「なんで隣座るんですか？」

和哉「なつみの座るクッションを指さし）それ見てさっき気づいた。このポジションでこうでしょ。君はずっと一人でTVを見ながらごはん食べてたんだって」

なつみの席の正面は、小さなTV。今、和哉と肩を並べてTVを見る形に。

和哉「こうやって二人で見ると、寂しくないもんだよ」
なつみ「…あ」

和哉「罪のない笑顔」

○美大、デッサン室

黙々とデッサンにはげむなつみ、学生達。
隣の和哉、間を盗んでなつみにキスをする。
なつみ、びっくりして和哉をはたくが、顔は嬉しそうである。和哉は罪のない笑顔。

○モニタージュ

バイトして、給料もらって、画材に消えて、
バイトして、給料もらって、二人の米と味噌に消え、
バイトして、給料もらって、二人で机の上で残金を数える。

○なつみの部屋、夜

バイト雑誌を見ていたなつみ、声をあげる。
なつみ「時給1400円！」

ちらかし放題でごろごろしていた和哉、見る。

なつみ「お客さんにお酒を出して、飲食同伴なしのウエイトレス
…かなり、怪しい」

和哉「でも風俗じゃないよね」

なつみ「時給1400円か。背に腹は変えられないし」

和哉「でも風俗じゃないよね」

○クラブ「ベリーショート」内

ミニスカートの衣装で、壁にもたれているなつみ會頭のシーンである。スカートをはひっぱる。

なつみ「できるだけ早く、この店を辞めなくては」

× × ×

杏子「よかったあー！ー！」

いきなりなつみを抱きしめる杏子(30)。ガリガリの体で、ヤンキー風の化粧と金髪。

杏子「一日来てびびってやめちゃう子多いのよー。店長や客はロクな奴じゃないけど、女の子同士は仲良くしようね」

なつみ「はあ」

杏子「楽しくお話をすればいいだけだから。困ったら笑うのよなつみ「はい(少し楽になる)」

小柄でコワモテの店長が顔を出す。

店長「こーら、バカ女ども！ 朝礼やつぞ！ ハイ整列！」

ミニスカ嬢達がぞろぞろと整列。なつみは後ろの方。

店長「ハイバカ女、時給は！」

ミニスカ嬢レイコ(27)「1800円です！」

店長「ハイバカ女、時給は！」

杏子「1900円です！」

店長「そのバカ女は！」

なつみ「1400円、です」

店長「オープンからフルで6時間、働くと！」

レイコ「10800円、です！」

杏子「11400円、です！」

店長「それが今の君たちの値段。できるだけお客を増やして、できるだけ自分の価値を高めるのがお仕事です。私はバカ

女、ハイ！」

全員「私はバカ女！」

なつみ「遅れてつぶやく」私はバカ女」

店長「よーし、男のいるバカ女は一步前に入る！」

杏子、レイコなどが一步前に入る。なつみは前に入らない。

店長「へえーおまえ男いねえんだ。じゃあかわりにケツもんでやるよ」

なつみ「あははやめて下さいよう」

なつみ「あははやめて下さいよう」

○同、待機スペース

杏子「あんたそんなことされてイヤじゃないのっ？ イヤだっ

たらイヤって言わなきゃダメだよっ！」

なつみ「でもウケがよくなるんですもん（つくり笑い）」

杏子、怒って出ていく。

なつみ「…（つくり笑い）」

○最終電車内

満員の終電。なつみの周りは全員酔っ払い。カーブで右の酔っ払い達もたれてくる。次の左カーブで左の酔っ払い達もたれてくる。

誰かが遠くで吐いた音。臭いの充満する車内。電車が加速したせいで、なつみの足下にまでゲロがやってくる。満員なので、誰も足を動かさない。

○東京郊外の駅前、深夜

ゲロのついた靴を地面にこすりながら歩いてくるなつみ。空地に止めてある自転車に乗って家路を急ぐ。

○なつみの部屋、深夜

二人の部屋はモノが増えている。

なつみ「ただいま」

和哉のちらかした服を足でどけながら入ってくる。

和哉「おかえり。…どうよバイト？」

コンビニの袋とか、適当なゴミをのけて、和哉の隣

に座るなつみ。

なつみ「大丈夫。風俗じゃなかった。けど…」

和哉「けど、何？」

なつみ「(モノを片づけながら) …和哉は今日一日何してたの？」

和哉「ずっと寝てたよ。寝ながら次に描く絵の事考えてた。寝

てるとね、腹へらないんだよ」

なつみ「え、今日バイトじゃなかったっけ」

和哉「うん。実は喧嘩して辞めた。意地の張り合いじゃなくて、

どっちが正しいかの問題だ」

なつみ「なにがあったの？」

和哉「俺は何ものにも拘束されない絵描きになるんだ。芸術を

志すものは志を曲げては志にならない」

なつみ「…じゃまたバイト探さなきゃね。私だっていつまでもあ

の店で働くのやだもん」

和哉「風俗じゃなかったんでしょ？」

×

×

×

回想。店長に尻を何度も触られる。泥酔客にスカ-

トをめくられたり、ディープキスされそうに。

×

×

×

なつみ「そりやそうだけど！ お尻触られてニコニコしなきゃい

けないし、みんな私をバカ女って呼ぶし！」

和哉「先は長いんだし」

なつみ「長くないよ！ 私は出来るだけ早く絵描きになりたいし、

出来るだけ早く形になってたいの！」

和哉「どんな形？」

なつみ「…」

和哉、なつみの頭をなでる。

なつみ「もうやだよあんなバイト」

和哉「そうか」

和哉、なつみの頭をなでる。二人、くっつく。

なつみ「(独り言) 私はしあわせ。私はしあわせ。私はしあわせ」

いつのまにか、和哉は白馬の王子様の格好。赤いマ

ントで彼女を包む。朝まで二人はくっついている。

○美大、デッサン室

中央の石膏像に近い学生ほど、写真のようによくうまい。
後方のなつみは下手。その周りも下手。どうやらな
つみは下手グループである。

○クラブ「ベリーショート」内、待機スペース

隅の席にひとりで飲むよれよれのおやじ（渡辺）。

なつみ「えー？ いつもラストまでいるあのおやじですか？」

杏子「もう誰も相手しないんだよ。聞いた？ 独身だから家帰
るのも寂しくてずっといるんだって。もう女の子と話す話
もなくてさ、ずっとピーナッツの数かぞえてるってよ」

なつみ「地味すぎる」

レイコがフォローに入る。ピーナッツの数を一緒に
かぞえてあげる。よろこぶ渡辺。

店長「なつみちゃん、ダンプの島田さんに入って」

○クラブ「ベリーショート」内、島田の席

ダンプ運転手の巨漢島田。

島田「なんだなっちゃんかよ。他いないの？」

なつみ「他は失礼じゃないすか。今日は混んでるんです」

島田「まあいいや」

なつみ「どうしたんですかげんきないですよ？」

島田「えへ。そうみえる？」

なつみ「社交辞令ですよ」

島田「なんだ。でも最近長距離の運転がつらくてさ。眠いまま
深夜走つてるところのまま事故って死んだ方が楽って思っ
ちゃう。ライバルの運送会社が俺を追い抜いていくと、ほん
と辛い」

なつみ「そういう時は、なにか面白い事を考えるといいですよ」

島田「なにそれ？」

なつみ「例えば、UFOとか」

島田「んん？」

○なつみのつくり話、深夜の高速

なつみの声「UFOってよく深夜の高速に現れるんです。知ってます？ 隠れるのがうまいから誰も気づいてないけど」

ダンプで走る島田。後ろにUFO。気配で後ろをみるが、UFO隠れる。また後ろをみるが、UFOまた隠れる。

島田の声「ウソだめ」

なつみの声「でね、UFOはダンプごとさらうんです。飛ばしすぎている車から順番にね」

島田のダンプを追い抜いたライバル会社のダンプがUFOにさらわれる。ついでに牛もさらわれている。

島田の声「ホントにそうだといいなあ。でもなんで俺はさらわれないんだよ」

○クラブ「ベリーショート」内、島田の席

なつみ「うーん、持ち上がらないんじゃない？」

目の前の島田はかなり巨漢。

島田「…ぶぶぶ。そんな科学力ないの宇宙人？」

なつみ「いくら科学が進んでもデブだけはね。アメリカだってデブ問題解決してないし」

島田「ブハハハハハ！ お前おもしれえな。そんな発想考えた事もなかったよ」

なつみ「はあ。ありがとうございます」

島田「またおもしれえ話してくれよ。元気出てきた。帰る」

○同、待機スペース

なつみ「なんか感謝されちゃったんですけど」

杏子「めずらしいね。あのオッサン、バカ女バカ女って話しか

しないのに」

店長「なっちゃん、ピーナッツおやじ、ついて」

○同、渡辺の席

渡辺「知ってるよ」

なつみ「はい？」

渡辺「みんな俺をピーナッツおやじって呼んでるんだ」

なつみ「そんなことないですよ」

渡辺「ボクはつまらないかな？」

なつみ「そんなことないです」

渡辺「じゃあボクと話、してよ」

なつみ「はい。ピーナッツかぞえるよりは」

渡辺「ホラ知ってるんじゃない。きつとピーナッツ数えるしか話
のないおやじだつてキミも馬鹿にしてるんだ」

なつみ「ちがいます」

渡辺「どこが違うんだよ」

なつみ「えつと、ピーナッツの精の話知ってます？」

渡辺「ん？」

○なつみのつくり話、森のファンタジー

なつみの声「ピーナッツの精はね、とらわれの妖精なの」

ピーナッツの精。でも演者はピーナッツおやじ。

なつみの声「ピーナッツの精は、こうして、ふたつの中にはさま
つてるの」

ピーナッツを。パカつとあけるとピーナッツの精。

なつみの声「ピーナッツの袋には、必ずひとりだけピーナッツの
精が入つてて、でも最後に食べられるピーナッツの時だけ

しか、ピーナッツの精は外に出られないのよ」

渡辺の声「外に出ると？」

なつみの声「人間に戻れる」

わーつと人間に戻つたピーナッツの精走っていく。

渡辺の声「最後のピーナッツ以外だと？」

なつみの声「そのまま食べられちゃうだけ」

ピーナッツの精、巨大な人間の口に食べられる。

○クラブ「ベリーショート」内、渡辺の席

渡辺「それじゃあ、なんとかして我々はピーナッツの精を人間にもどす為に、それ以外のピーナッツだけを食べなければならぬのか」

なつみ「そういうこと」

渡辺「困った。どれから食べよう。うーん参った。これだつ。」

いや、これかもしれない(色んなピーナッツを楽しそうにかきわけはじめる)

なつみ「笑顔」

○同、別の客(小野寺)の席

なつみ「それは前世で恋人ってやつよ！」

別の客(小野寺)「いやいやいや俺の話聞いてた？ あんな超ヒ

ドイ女が前世の恋人？」

× × ×

小野寺の取引先。担当の女性、Sっぽい栗岡(33)が小野寺に辛く当たっている。小野寺、胃が痛い。

○なつみのつくり話、砂漠の王国

なつみの声「それは砂漠の国の、身分違いの恋の話」

ピラミッドを積むために、奴隷の列が石を運んでいる。その中の一人(黒人んだけど小野寺)、気を失って倒れる。水をかけられ、強制的に起こされる。

水も滴るイイ男になった瞬間、クレオパトラのような格好の王女(演ずるは栗岡)が目ぼれ。

なつみの声「王女は奴隷の監督官を申し出て、彼に尋常じゃない仕事を押しつける。なぜかって？」

とてつもない石の山を一人で運べと鞭で指示。

夕暮れ、みんな帰っても、一人黙々と作業する奴隷。
そこへ王女が一杯の水を差し出す。セクシーに飲み
干す奴隷。

なつみの声「ふたりきりで会う為だったのよ」

情熱的に抱きしめあう二人。

○クラブ「ベリーショート」内、小野寺の席

小野寺「…って、キミ前世が見えるの？」

なつみ「つくり話です」

小野寺「じゃウンなんじゃん！」

なつみ「でもその取引先の女性が毎回毎回注文だすんでしょ？」

小野寺「死ぬ程夜中にケータイで呼び出したし」

なつみ「一人で残業抱えさせるようなムチャ仕事させたり」

小野寺「ハッ…王女と奴隷じゃないか！…って、そんな訳ねえ

だろ。でもそう考えると、あの女、鞭の女王っぽいな。前

世でもそうだったのかも。アハハ」

なつみ「笑」その調子」

○小野寺の取引先の会社、夕方（後日）

栗岡「まったくどういうコト！ 注文は変わったって言ったじ

やない！ 納品は明日の朝イチなのよ！！」

小野寺「また無茶なご注文を（余裕）」

栗岡「できるの？ できないの？」

小野寺「やってみせますよ。おいしい水を一杯、用意してて下

さい（あの奴隷と同じカッコイ顔の上げ方）」

栗岡「…？（ひるむ）」

○渡辺の会社

窓際ですることもなく外を見ている渡辺。

部下「千葉出張の土産です」

ドサツと置かれたのは、落花生つめあわせ。

渡辺「うはっ！ これはピーナッツではないか!!」
部下「今日の渡辺次長、えらくテンション高いスね」
渡辺「そうか？ 仕事も昔はこんな感じだったぞ」

○深夜の高速

島田、辛そうにダンプを運転中。時速130キロ。
それを更に追い抜いていくライバル社のダンプ。

島田「(微笑む)：そんな調子じゃ、いつかUFOにさらわれてあの世行きだぜ」

スローダウンする島田。

○クラブ「ベリーショート」内、エントランス(後日)

島田「なつみ、いる？」

小野寺「なつみちゃんを」

渡辺「なつちゃん指名したいんだけど」

○同、待機スペース

レイコ「最近なつみリピーター多いっすね」

杏子「私よりブサイクなクセに」

なつみの周りには客が7、8人取り囲んでいる。

レイコ「なんか特殊な人生相談所みたいになってない？」

活き活きしはじめるなつみ。

○なつみの部屋、朝

ねむいけど、頑張って起きるなつみ。和哉は隣でまだ寝ている。

なつみ「学校、どうすんの？」

和哉「今日はいかない」

なつみ「ひげぼうぼう。今日もバイトで遅くなるから」

随分のびた和哉の無精髭にキスして、なつみは外出

の支度。

○クラブ「ベリーショート」内

なつみは10人くらいの常連に囲まれて、次々と話をつくっている。

なつみ「それは海賊ね。隠された財宝を取り合ってる」

なつみ「いいじゃない。目立たないのも才能よ。スパイの才能！

国際A級の！」

なつみ「全ての布を体にまきつけた、雪の中の。パキスタン人の話でした」

なつみ、聴衆の反応を見ようと一拍置く。と、その

横を店のナンバー1美女、葵が優雅に通り過ぎる。

みんな目で追う。どよめく周りの客。

なつみ「きれい…」

島田「誰？」

店長「当店ナンバー1の葵でございます」

島田「どうやったら指名できるの？」

店長「御予約は二ヶ月先まで埋まっております…」

渡辺「まじかよ」

VIP席の客につく葵。優美な立ち居振る舞い。

なつみ「手足長いし、顔小さいし、つくりが最初から何から全然違う。きれいなお姉さんて、ああいう事を言うんだ」

小野寺「聞いた話だけど、あの子殆どしゃべんないんだって。それより先に客の方が気を引こうとしてマシンガントーク」

なつみ「そんな、私必死でしゃべってんのに。じゃ私の努力ってなんなんスカ」

小野寺「芸人と芸能人の差？」

なつみ「…同じ女に生まれているのに」

葵に花束を渡す客。受け取り方も優雅。

島田「なんで女ってあも花が好きなのかね」

なつみ「花？」

島田「どの子も花束が欲しいっていうし、男的には、花なんかに興味ねえじゃん」

なつみ「知らなかったの？ 女は昔、花から分かれて出来たのよ」
渡辺「おっ。みんな、またはじまったぞなつみの話」

○なつみのつくり話、擬人化された花の花畑

進化系統樹。花から分かれて女への図。

そこは花畑。擬人化された花がたくさん生えている

(主な花役は、なつみ、杏子、レイコ、葵。)

なつみの声「花はね、実を結ぶために咲くの。自分の人生かけて
実を結びたいの。だから、自分のエネルギーを全部キレイ
に咲くために使うのね」

白馬の王子様が通りかかる。花達、精一杯微笑む。

葵を選んでキスする王子。葵、実になる。

なつみの声「花は動けない。だから誰か立ち止まってくれるのを
待ってる。茎や葉っぱや見せない部分の力も使って、精一
杯見てほしい所にエネルギーを集中するの。花は花畑で生
まれるから、他の花を気にしながら生き続けて」

○クラブ「ベリーショート」内

なつみ「もちろん、今の女のコは勝手に動ける足があるし、ホン
トに待ってるだけの女のコはいないかもだけど、お花を見
ると、女は大昔に花の遺伝子を持つてた事を思い出すんじ
やないかな。同じく実を結びたい運命だつて事を思い出す
のよ」

客たち「ほほう」

なつみ「だから女の子にはお花をあげてね。女は花から元気をも
らうから」

○クラブ「ベリーショート」内(後日)

開店前。贈り物の花で一杯になっている店内。

ミニスカ嬢1「なんか最近お店にお花増えたー」

ミニスカ嬢2「イヤな店だけど、今日は楽しくやろうって思うね」

レイコ「なんか、あの子が来てから店の雰囲気が悪くなった気がする」

○吉祥寺の大通り

シヨツピング中、街で美容師（青山）に声をかけられたなつみ。

なつみ「カットモデル？　って何ですか？」

青山「あ、僕こういう者ですけど（名刺渡す）、まだ美容師の卵なんです、この夏流行の髪型のモデルになってほしいんです」

なつみ「流行の髪型のモデル」

青山「青山のウチの店に来てもらって、その髪型に切らせて下さい」

なつみ「私がモデルですか！」

青山「ハイ」

なつみ「ハイ、やります（即答）」

青山「あ…じゃですね、今週末の木、金どっちでもいいんで、2時に来れますか？」

なつみ「大丈夫です。木曜日で」

青山「それと……（言いくそうに）当日は、できるだけキレイな服で、できるだけオシャレしてきてください」

○なつみの部屋

洋服ダンスをひっくり返しているなつみ。

なつみ「これはここにシミがあるし、ああこれもダメだ」

時計を見るともう1時50分。

○青山のヘアサロン

走って飛び込んでくるなつみ。

なつみ「スイマセン、すごい遅刻で。青山さんの紹介で…」

ずらりと、50人くらいの女の子が髪を同じ髪型に

切られている。大勢のスタッフの中に青山。

青山「ああ。そこをお願いします」

慌てて座るなつみ。

なつみ「服はこれで…」

バサリと白い布をかけられ、服は見えなくなる。

切られる始めるなつみの髪。青山が上を切ったら、次の美容師が右側を切り、次の美容師が左側を切るなど、なつみは、流れ作業の中の一人にすぎない。

× × ×

同じ髪型になった女の子達は、列に並んでポラ写真を撮られている。なつみもその中の一人。封筒入りの謝礼が、機械的に渡されていく。なつみ、そんな自分を鏡で見る。

なつみ「…絶対、私が一番似合っていない」

後ろを通る同じ髪型の女の子達。全員自分を見ているのだが、なつみは自分が比較されているように感じる。

○都会、デパートのショーウィンドーの前

手をつないで歩く和哉となつみ。なつみは髪型を気にして帽子をかぶっている。和哉はいたずらっぽく帽子をとって髪をなでる。なつみは嫌だけど、頭をなでられてうれしい。

和哉「お。カワイイ。お、あの子もカワイイ。やっぱ都会の子は違うなあ（街行く女の子に目移り）」

なつみ「もお。私らだつて一応東京の住人でしょう？」

ピタリと立ち止まる和哉。巨大な看板に釘付けになる。それはファッション雑誌の広告。主役は、葵。活動的なミニスカートの、こちらに微笑んでいる。

なつみ「あっ…！…葵さん」

× × ×

店で優雅な立ち居振る舞いを見せる葵のフラッシュ。

× × ×

客 「花束を持って）ええ？ 今日葬ちゃんいないの？」

店長 「申し訳ありません。私どもの店よりも、更に大きな所へ
引き抜かれたようで。送別会もございません」

× × ×

看板を見ていた和哉、そろそろ行くこうかと思うと、
ショーウインドーになつみが釘付けになっている。
なつみの見つめるショーウインドー。オシャレなワ
ンピース。

和哉 「その服？ いいね」

ガラスの写りこみで、看板の葵とだぶっている。

なつみ、値札を見てためらう。

なつみ 「たっかー。でも、一週間毎日ラストまで出れば…」

× × ×

その服を着て出てくるなつみ（買った）。ショーウ
インドーに自分の姿を映す。

なつみ 「きれいかなあ」

和哉 「きれい」

なつみ 「きれいかなあ」

和哉 「きれい」

なつみ 「もっと言って。もっと言って」

嬉しそうななつみ。ポーズをとったり。

○美術専門の本屋の前

なつみ、高い値段の美術本の前で立ち止まる。

なつみ 「……」

和哉 「？ どうした？」

突然、なつみの目からぼろぼろと涙。

なつみ 「私なにやっただら」

和哉 「どうしたのなっちゃん」

なつみ 「私絵描きになるために田舎を飛び出したのに。絵描きに
なるお金を貯める為にあんなところで働いてるのに。その
お金をこんな服に使っちゃって。なんで私絵の本を買わな
いの？（涙が止まらない）」

和哉「だっていくらすんだよその本」
なつみ「この服三回我慢すれば買えるのに！…私、かっこ悪い。
ホントかっこ悪い。なにしに私東京来たんだろう」
ポタポタとこぼれおちる涙。でも絵の本に落ちない
ように、絵の本をかばう。

○アパートへの道

とぼとぼと帰ってくる二人。
汚い三毛猫が弱々しく鳴いている。立ち止まる一人。

○動物病院、診察室

医者「伝染病に三つもかかっていますね。治療費は8万円ほどか
かりますが、どうします？」
なつみ「8万円！」
和哉「でも死んじゃうんでしょこの猫」
医者「このまま放っておくとね」
なつみ「…(財布を開いて中を確認して) お願いします。後日の
支払いでもいいですか？」

○アパートへの道、夕方

三毛猫を抱いている和哉。その先を早足で歩くなつ
み、追う和哉。
和哉「命のほうが大事じゃないか。仕方ないよ」
なつみ「仕方なくなんかない！ 明日の千円だって苦しいのに、
8万円なんかない！ 私はあるたとその猫が大嫌い！ こ
の服だって二度と着ない！！」

○なつみの部屋、夕方

和哉 三毛猫を毛布でくるんであげている。
和哉「もう大丈夫だよ。安心してね」

今日の出来事に疲れたなつみがつぶやく。

なつみ「……ねえ、私にも言って」

和哉「なにを？」

なつみ「今言ったことば」

和哉「なに言ったっけ」

なつみ「もう大丈夫だよ、安心してね」

和哉「（棒読み）もう大丈夫だよ、安心して」

再び猫を可愛がる和哉。

なつみ「（独り言）…私は守ってもらってるだけの猫じゃないんだ。こんなコトやってる場合じゃないんだ。最近の花は、足だって生えてるんだ」

○クラブ「ベリーショート」内

画用紙でつくった名刺。

名刺『絵を描きます。なんでも描きます。イラストレーター72

3（ナツミ） 090—：』

島田「なんだこりゃ？」

なつみ「絵を描きます。なんでも描きます。私絵描きになりたそ

もそも上京してきました。仕事ある人紹介して下さい」

島田「はじめてなつみに営業されたよ。今日のオモシロ話は？」

なつみ「それはどうでもいいんです。イラストレーターでも何で
「も」

不意をつかれて顔を見合わせる常連客。

○超大手出版社の前

島田が待っている。

島田「ようなっちゃん。それが、絵？」

なつみ「そんないきなしココですか」

作品集ブックを不安そうに抱えながら。

島田「昔本の運送してた時の担当がさ、ここの倉庫係に異動したんだ。編集の白石つつうべっぴんがいるのよコレ」

○同、応接室

立派な応接室。なつみと島田はかなり場違い。

白石「お待たせしました」

デキる女の代表のような白石（32）が現れる。

島田「よう絵描きのねえちゃん連れてきたぜ」

なつみ「（ひとりとごと）ちっ。男だったらくみしやすかったのに」

なつみ、無理して着たノースリーブにジャケットを

羽織り、胸前のボタンをしめる。

白石「白石です。はじめまして」

ぎこちなく名刺交換するなつみ。

白石「拝見します」

白石、作品集のスケッチブックをあける。

なつみ「これは横尾忠則風で、これは村上隆風。あ、五月女ケイ

子風もあります。あとシヤガール、空山、…」

島田「いつデートしてくれるんだよう」

白石「今絵を見せて頂いているんです。静かにして下さい」

一枚、一枚、丁寧になつみの絵を見ている白石。

なつみ「…」

また頭から一枚一枚見る白石。

白石「一番得意なタッチでもう一枚描いて来てもらえますか」

なつみ「え。（驚愕）」

○超大手出版社の前

同じ表情のまま、立ちつくすなつみ。

○なつみのイメージ、黒バック

白石が走ってきて、巨大なハンマーでなつみの頭を
思いきり殴る。なつみの頭、とれて転がる。なつみ
の体、あわてて頭を拾ってくつつける。

○超大手出版社の前

まだ耳がぐわんぐわん鳴っている。
なつみ「…一番得意なタッチなんて、ない」

○別の出版社、中

なつみ「これは横尾忠則風で、これは村上隆風。あ、五月女ケイ子風もあります。あとスポーツ系、エロ系…」
編集者1「今欲しいのは別にないんで」

○別の小さな出版社、中

編集者2「どっかで見たものしかないね」

○別の小さなエロ出版社、中

同じく、編集者（根津）に絵を見せているなつみ。

根津「どれか一個でも引つかかればいいと思っ
てないか？」

なつみ「いや、そんなコト、何でも描けますと、いいたくて」

根津「何でもは描けないよ、プロレベルで」
なつみ「…」

根津「東京という所はさ、まニューヨークでもロンドンでもそうなんだろうけど、誰かのパチモンなんていら
ないんだよね。誰にも似てないオリジナルがみんな欲しいんだよ。他の人には描けない、題材、興奮、アングル。とくにウチはアングルかな」

周りはエロまんが雑誌やポスター。ここはエロ雑誌編集部。

根津「キミ自身のエロエロな体験を聞かせてくれよ」
なつみ「（立つ）し、失礼しましたー」

あわてて逃げるなつみ。苦笑する根津。

○出版社の前、橋の上

なつみ「得意なタッチ、オリジナル。得意なタッチ、私自身」

川面を見つめるなつみ。街じゅうに葵の看板。ミニスカートでこちらに微笑み続けている。

○更に別の出版社、中

ミニスカートで足を組みかえるなつみ。それをのぞこうとした編集者にすかさず絵を見せる作戦。

○更に別の出版社、中

なつみ「今なら半額で。しかももう一枚、同じ絵を描いてきます」
編集者3「？」

○更に別の出版社、中

なつみ「キャラものつてありますよね？ 未来から来たネコ型ロ

ボット、一見子供のような実は大人の名探偵、黄色いハムスターっぽいのがピカピカと……」

編集者4「ぜんぶウチの著作権じゃねえか」

なつみ「ダメつすか同じ出版社つてことで」

編集者4「アホかきみは」

○別の出版社、待合ソファのある廊下

なつみが座って待っていると、離れて隣に、原稿を

もったままわんわん泣いている女の子漫画家（花

島）。なつみ、ハンカチを渡す。

花島「すいません」

なつみ「どうしたんですか？」

花島「やっと連載できたのに。お父さんガンで入院してて私のまんが楽しみにしてるのに。連載5回目で、次でおわりにしてくれて。約束は7回だったのに。全部できてるのに」

なつみ「ひどいね」

花島「せっかく、もう全部できてるのに（号泣）」

なつみ「…つまんないから悪いんじゃないスカ。かく側の事情なんて読者は関係ない。面白いか面白くないかでしよう？」

花島「ひどい……」

なつみ「そのくやしさを、もう一回面白おかしく描くべきです」

花島 ショックで走って立ち去る。

なつみ、自分の作品集を広げる。

なつみ「（自分の絵に）…つまんないから悪いんじゃないスカ」

○なつみの部屋、夜

洗濯物が夜までとりこまれてなくて、イライラする
なつみ。台所は洗い物の山。和哉はごろごろ。

なつみ「ちよつと和哉！ 洗濯物とりこんどいてって言ったよね！ 全部湿ってんじゃないの！」

和哉「ああ、忘れてた」

なつみ「部屋、片付けてよ！ 足の踏み場もないわよ！ 私、疲れて帰ってきてるのに！」

和哉「ああ、おつかれさま」

なつみ「料理以外生活能力ないんじゃないの？ 後片付けしないし、ヒゲぼーぼーだし！ 自分の部屋もこうなの？」

和哉「大体」

なつみ「もうやだ！ 自分の家に帰って！」

和哉「なんだよ急に」

なつみ「急にじゃないわよ！ ずっと思ってたわよ！」

和哉「イライラすんなよ。何があったの？」

なつみ「うるさい！ ……なんで、なんで働かないの？ なんて私ばっか働いてんのに何とも思わないの？ なんで和哉は私の人生めっちゃめちゃにしてんの？！」

和哉「ちよつと待ってよ、オレのせいだよ」

なつみ「ぜんぶぜんぶあなたのせい！ もう一回東京来た所からやり直せたらいいのに！！」

和哉「…（上着を着はじめる）…じゃあ、自分のアパートに帰

るよ。頭冷やしてくる」

出ていく和哉。バタリと閉められるドア。猫、所在なさげ。閉まったドアに洗濯物を投げつけるなつみ。

○クラブ「ベリーショート」内

魂がぬけたようななつみ。

小野寺「最近、なっちゃん変だぜ」

渡辺「ていうか、出版社紹介してくれって言ったあたりから、

おかしくなっちゃったよね」

島田「俺のせいかよ」

○クラブ「ベリーショート」の裏口、繁華街、夜

店長 帰るなつみに声をかける。

店長「よお」

なつみ「店長」

店長「どうしたの？ 最近勢いないね」

なつみ「スイマセン」

○居酒屋

店長「まあまあまああ」

と、店長の方からビールをつぐ。

店長「葵ちゃん辞めてさ、ウチの目玉もいなくなったし、けっ

こうなつみりピート率高いんだよね。ウチの店に必要な人

にランク上がってるんだよ」

なつみ「はあ。ありがとうございます」

店長「猫、元気になった？」

なつみ「え、なんで猫飼ってるって知ってるんですか？」

店長「これも店長の仕事のうち」

なつみ「すごいですね」

店長「あはは。人をホメるのが上手いね。キャバ嬢が板につい

てきた証拠だね」

なつみ「へえそうなんだ」

店長「……（色々しゃべるが、なつみには聞こえていない）」

なつみ「すごいですね」

店長「……」

なつみ「へえそうなんだ」

店長「……」

なつみ「すごいですね」

店長「……」

なつみ「へえそうなんだ」

ずっとなつみはつくり笑顔。指先はイライラ。

○東京郊外を走るタクシー車内、深夜

店長「あ、そうだ。猫見してよ。買ったんだ（コンビニ袋に猫缶）」

なつみ「かんべんして下さいよう。ウチの子人見知りなんですよ」

店長「いいじゃんちよっとだけ部屋あがらしてよ。エサだけあげたらすぐ帰るし」

なつみ「かんべんして下さいよう」

店長「男いないって言ってただろ？ 猫相手じゃさみしいだ

ろ？（手を握る）」

なつみ「（運転手に）停めて下さい。（店長にはつくり笑顔でもう近くなんです」

あわてて降りるなつみ。そこはまっくらな郊外の畑ばかりの所。

なつみ「ちそうさまでした」

はや歩きでのなつみ。車が横を追ってくる。窓から顔を出す店長。なつみ、早足。

店長「なんだよ！ 旨い飯おごったじゃん！」

なつみ「だからちそうさまでしたって！」

店長「そんだけかよ！」

なつみ「じゃタクシー代込みで払います！（財布から一万出す）」
つくり笑顔のまま競歩のように加速するなつみ。

店長「なつみ！」

タクシーも加速して併走。なつみ、車では入れない狭い農道に入っていく。タクシー急ブレーキするが、道の砂で止まりきれず脱輪。

○クラブ「ベリーショート」内

店長「ようなつみ。昨日はハナからおまえをやっちゃう気だったんだぞ。ホントラッキーだったなあ」

なつみ「アハハハハ」

店長の背中につぶやく。

なつみ「お前なんかにやられたってなあ、あたしの人生はちよつとだって変わるもんか。…できるだけ早く、この店を辞めなくては」

○後日、電車内

ペット屋のビニール袋を持って、メモをみているなつみ。

○住宅街

メモをみながら家を探すなつみ。

○汚いアパートの前

ガチャリと開くドア。少しやつれた杏子。でも笑顔。杏子「ごめんね心配かけて」

なつみ「ドッグフードってこの柔らかいタイプで（出す）」

○杏子の部屋

狭い部屋のまん中のこたつに、大きな老犬が入ったまま動かない。ゴソツと抜けた毛が部屋中付着したり、畳に染みが出来ていたり、ただでさえ古い部屋

が犬で汚れている。

杏子「野良で殺されそうになってたのを引き取ってから随分経つただけだし、もう弱っちゃってて、上からも下からももらしちゃって大変なのよ」

愛情こめて犬を抱く杏子。だるそうに舌でなめる犬。

杏子「今日はありがとうね。お店もう二週間は休んでるよね」

なつみ「みんな心配してましたよ」

杏子「アハハこの子のせいだってもコレ見ないとわかんないよね」

なつみ「杏子さん、意外と苦労人なんですネ」

杏子「なんで？」

なつみ「もつと広い部屋に住んで、毎日楽しそうに暮らしてるのかと思ってた」

杏子「アハハ苦労してんのはみんな同じよ」

なつみ「地方出身者はみんな苦労すんのかなあ」

杏子「えっ、私、東京よ」

なつみ「えっ」

杏子「東京出身者が苦労しちゃいけないの？」

なつみ「そんなことないですけど。ホラ、東京の人ってみんなオシャレでキレイでスマートな人達で、あ、いえ、杏子さんの事じゃなくて」

杏子「悪かったわねーしよぼくて（笑）。実際、東京の人なんて地味につましく暮らしてるもんよ。カッコつけてんのは大概どつか他所の成金なんだから」

なつみ「えっそうなんですか。意外」

杏子「東京の人が特別ですごいんじゃないわよ。特別な人がすげえ」

犬が咳をする。杏子、さすってあげる。

杏子「ともかくこいつがこんなだからさ。アハハ。しばらく店出れないかもねアハハ（笑顔）」

○小さな居酒屋、深夜

花束をもつレイコ。なつみ、杏子、他ミニスカ嬢が

集合。

杏子「カンパーイ！ レイコ、長い間おつかれさまー」

レイコ「ありがとう。杏子さん大丈夫なの？」

杏子「レイコの送別会に来れない訳ないじゃない。しかしよく

店辞める決心ついたね」

レイコ「うん。田舎帰って、お花屋さんに勤める事にしたんです」

杏子「劇団は？」

レイコ「きっぱりあきらめました」

なつみ「えっ。レイコさんって劇団やってたんですか」

レイコ「アハハ。この年でミュージカル女優目指してたんだけど

ね。そうそう、こないだのなつみの話じゃないけど、お花

が女の子を元気づけるんだって思っ。なんか女の子を庇

援する仕事をしたって思ったの」

なつみ「あっ。…」

レイコ「なつみ田舎帰ってる？」

なつみ「いや、東京きてから一度も」

レイコ「だめよ帰んなきゃ。親とか友だちとか心配してるよ」

なつみ「いや、別にあんな何にもない街」

レイコ「なんにもないわけじゃないじゃない。あなたは突然東京から

はじまった訳じゃないでしょう？」

なつみ「…はあ」

○東京郊外の駅前、深夜、雨

改札を出てきたなつみ。雨が降っている。困った。

タクシーの列を見るけど、財布を開いてあきらめる。

停めてあった空地の自転車に男物の傘がくくりつけ

てある。傘には「和哉」という名前が。

○傘をさして自転車でいそぐなつみ

○なつみの部屋、深夜

ドアをあけると、中の電気がついている。

和哉が座っている。

和哉「おかえり。雨冷たかったんじゃない？ お風呂わかしてあるからあったまりなよ」

なつみ「…傘、助かった」

立ち上がり、バスタオルでなつみを頭から拭いてあげる和哉。ゆっくりなつみを抱きしめる。

なつみ「なんで帰ってきたの？」

和哉「なつみがひとりですべて見てる所想像したら、寂しそうで耐えらんなくなってる」

なつみ「…和哉は、やさしいんだね」

和哉、頭をなでてキスしようとする。

なつみ「でもその優しさが私を傷つける」

キスを拒否するなつみ。体を離す。

なつみ「私はあなたの優しさを毛布がわりにしてただけなんだと思う」

和哉「…」

なつみ「今日は別々の布団で寝てもいいから、明日には出てってね」

○なつみの部屋、翌朝

一人で目が覚めるなつみ。ほんとうに一人になった。

○なつみのポストに葉書

○なつみの部屋

葉書をもって帰ってきたなつみ。

葉書『私たち、結婚します。結婚式の御案内』

きいちゃんとヤンキーのダンナの写真。

なつみ「きいちゃん。…結婚！…」

葉書の手書きの文字『会いたい。あの野原で3人で会いたい』

× × ×

3人でいた野原、フラッシュバック。

なつみ「あのどんづまりの野原に、何があるっちゅうねん」
× × ×

送別会でのレイコの発言。

レイコ「あなたは突然東京から始まった訳じゃないでしょう？」
× × ×

部屋に転がる、ボロボロのスケッチブック。

なつみ「あのどんづまりの野原で、私は絵を描いていた」
顔をあげるなつみ。

○走る電車

○野原

隣の工場は、規則的な音を立てている。あの野原は、立ち入り禁止のロープが張られ、不法投棄のゴミや廃車の山があちこちにと、すっかり様変わり。

なつみ、ロープをくぐって敷地内に入る。

一番奥に、きいちゃんとみさちゃんが座っている。

遠くからでもきいちゃんはなつみを見つけ、大きく

背のびして手を振る。みさちゃんはベビーカーに赤

ん坊を乗せている。

きいちゃん「なつちゃん久しぶり！」

なつみ「…久しぶり」

みさちゃん「東京行って以来やな」

なつみ「そやね。(赤ん坊を指さし)誰？」

みさちゃん「(赤ん坊に紹介)なつみちゃんですよ。(赤ん坊の

手を無理矢理振らせて)マイ・サン。はじめくんです」

なつみ「かわいいー。(座る)…とりあえず、きいちゃん、おめ

でどう」

きいちゃん「ありがとう。私、めっちゃ幸せやで」

なつみ「まだ聞いてへん」

きいちゃん「笑」…鉄工所の3男でな。昔のトルエンで歯2本

くらいないけど、めっちゃ優しいねん(ケータイの待ち受

けを見せる。」

なつみ「鉄工所」

きいちゃん「鉄の削りクズって細かいから、ちゃんと服から落とさんと物干台で茶色いサビになってまうんやで。知らんかったやろ？ 今はまだ実家に通いやけど、もうすぐ新居に引っ越しや。遠ないから今度来てや」

なつみ「うん。でこの子って…」

みさちゃん「ちよつと一杯の男とつきおうてたら、父親が誰か分からんようになってもて。今一人で育ててる（笑）」

なつみ「それって」

みさちゃん「シングルマザーってやつかな。毎日保育所行って、仕事行って。…なつみは？」

なつみ「まだ美大生やけど、就職なんかない世界やから、今のうちから誰かに認められなあかんねん」

きいちゃん「誰かって？」

なつみ「画廊とか、出版社とか」

きいちゃん「うわあ東京っぽいなあ」

なつみ「まだまだだよ。…この野原もだいぶ変わったね」

みさちゃん「私も変わったかな？ あんま変わってへんと思うけど」

ロープを乗り越えて少年達が野球をしにくる。いつか見た風景のよう。微笑むなつみ。

みさちゃん「そや、知ってる？」

きいちゃん「なに？」

みさちゃん「大丸、とり壊されるらしい」

なつみ「えっ」

みさちゃん「だいぶ前に閉店して、ずっと廃墟やってんけど」

きいちゃん「忍びこんでみいひんか？」

なつみ「ええ？」

きいちゃん「夜中、3人で忍びこもうや。それで屋上でホットケーキ焼いてみいひんか？」

みさちゃん「あ。幸せのホットケーキ」

きいちゃん「それぞれ！ 『大丸の幸せのホットケーキ』を、私らで焼いてみようや！」

○なつみの家、台所、夜

夕食後。洗い物をなつみと母がしている。

なつみ 「しかしごはん炊きすぎやお母さん。腹パンパンや」

母 「せつかくなつちゃんが帰ってきたんやもん。ちゃんと食べさせな、またおじいちゃんに怒られるわ」

棚の上の祖父の遺影に線香。

なつみ 「お母さん、背え縮んだ？」

母 「なんでや」

なつみ 「小さくなった気がする。シワも増えた」

母 「アンタが大っきになったからやろ」

なつみ 「もう成長はせんで」

母 「違う違う。東京へ出て、大っきになったからやろって」

なつみ 「…なつてへん。小さくなつてばかりや」

母 「…私も、お父さんと離婚してこの家帰ってきた頃は、小さくなつてばかりやつたわ。それに比べたら大っきくなつたよ。なつみも大っきくなつた」

なつみ 「お母さんは、再婚とかせえへんの？ こんな広い家にな

人でやったらさみしいやん」

母 「慣れたよ」

なつみ 「今度東京遊びおいでや」

母 「ええよ」

ゴミを外に出しに行く母。

なつみ 「お母さんて、すごい人やつたんやな。この家一人で回してたんや」

母 「(振り返って) 何言い出してんの？ 頭打ったんか？」

なつみ 「私なんかじゃ同じ生き方はでけへんと思う」

母 「アンタにはアンタの道があるよし」

○大丸デパート前、深夜

自転車で集まったなつみ、きいちゃん、みさちゃん
とはじめ。懐中電灯、ホットプレート、材料、ビー

ル、つまみやらを持ち寄っている。

廢墟同然のデパート。往事の活気の名残が、風化したビルに微かに残っている。ヤンキーのスプレアの落書きが痛々しい。

なつみ「黒猫拾った時も、海へ走った時もそうやったけど、率先

してきいちゃんはこんな事考えるな」

きいちゃん「おもしろい事が待ってるかも知れへんやんか」

柵を乗り越えて、探検開始。

○大丸屋上、深夜

錆びた鉄扉をあけて、屋上に辿りつく3+1人。

なつみ「うわー気持ちいい風」

ときいちゃんに振り向こうとするとマネキンの首。

なつみ「うわっびびくりした！」

きいちゃん「あはは。さっきこっそり拾った」

錆びついて動かない観覧車や遊具。夢の屋上の残骸。テーブルと椅子と破れたパラソルを並べて、持ってきたものを広げる。ホットプレートに火を入れ、ビールで乾杯。ホットケーキをつくりはじめる。

みさちゃん「まだ覚えてんで。なつみの話にいつも出てきた、

幸せのホットケーキ。ケーキは二重で、バターも二重」

きいちゃん「どんな幸せな味やろうかと、ずっと気になってたんだよ」

焼き上がる一枚目。酒はビールから強い焼酎に。

きいちゃん「よっしゃ、とりあえず一枚目。なつちゃんだけで、

食べた事あんのは」

なつみ「(食^くべて、首をかしげる)これでは少なくとも、幸せになれん」

きいちゃん「そんな事ないで幸せの敷居を下げな。甘ければ幸せ

ぐらいやないと、一生幸せにはなられへんで。甘いか」

なつみ「甘い」

みさちゃん「甘い」

きいちゃん「幸せか」

なつみ「幸せ」

みさちゃん「幸せ」

きいちゃん「よっしゃ幸せか。幸せのホットケーキ、親友と食べ

る夢がやっと叶った。まあ飲め」

なつみ「なんかきいちゃん、変やで」

きいちゃん「(焼酎一気飲み) ハイ！ きいちゃん結婚記念

自分の秘密をひとつづつ告白する大会！ ハイ、みさちゃ

んから！」

みさちゃん「え」

きいちゃん「アレがあるやろ」

みさちゃん「…言うしかないか(なつみを気にする)」

なつみ「なに？」

みさちゃん「ハイ。秘密、言います。この子の父親分分からへん
て嘘ついてました。実は分かっています。豊田さんです」

なつみ「って誰？……あっ！」

×

白い車の、ゆうこりん好きの彼氏。

×

×

なつみ「え？ なんで？」

みさちゃん「なつみが東京行ってからやでつきあったんは。てい

うても、私あの時彼氏5人おったし、べつになつみの盗っ

たんちゃうし」

なつみ「いや、…今の今まで忘れてたわ」

きいちゃん「それはそれでひどいわ」

みさちゃん「今だに子供用のアイドル服、送ってきよんねん」

なつみ「結婚とかはせえへんの？」

みさちゃん「頼りにならないのなつみもよう知ってるやろ！ むし

ろ次のええ男探さな！」

なつみ「…たしかに」

みさちゃん「(焼酎一気飲み) じゃ次、なつみ！」

なつみ「えっ…なんやろ」

きいちゃん「じゃあとで！ 次、きいちゃんいきます！ (焼酎一

気飲み) …私の秘密は、…この結婚、失敗かも知れへん」

なつみ「なんで？」

みさちゃん「あした式やろ」

きいちゃん、お腹を見せる。アザだらけ。

きいちゃん「男に殴られるのは慣れてんで。殴るのは男やからしやあない。…でもなあ、アイツ式が近いから殴る所腹にするって、巧妙にアホやと思うねん」

なつみ、みさちゃん「……」

きいちゃん「私ブサイクやからそんなには幸せになられへんこと位知ってるで。私のマックスはこのへんか、とも思ってた。

でもそれで幸せ顔してるのが時々辛くなる。時々、私らでこうやって集まるな。そしたら多分それも我慢できる気がする」

みさちゃん「そんなこと考えてたんかきいちゃん」

なつみ「焼酎一気飲み」中途半端やなあ」

きいちゃん「え？」

なつみ「私の秘密。私、キャバやってます。つまりホステスです」

みさちゃん「えっ」

なつみ「絵の仕事なんかちつとも来てません。このまま金がないまま一生ホステスかも知れません。でも、小さい田舎飛び出して大正解。だってこんな女たちの不幸につきあわんですむやんか」

きいちゃん「それ私のことか」

なつみ「私はへえって思われたかった。絵描きになると言えば東京に行く理由ができるやろ。なんかとくべつな子になれるなら絵でもなんでも良かったんや、こんな中途半端な田舎捨てられたら！」

きいちゃん「中途半端って私の事か」

なつみ「私はアンタらを小さい女やって見下してた。でもな、私の方がもっと小さい女やねん。私は自分がたいした事ないって認めるのが恐いだけなんや！」

きいちゃん「中途半端って私の事か」

なつみ「きいちゃんは幸せを待ってるだけや！なんで自分から

なんも言わへんねん！」

きいちゃん「なんやと！」

みさちゃん「なつみ、飲みすぎちゃうんか」

なつみ「みさちゃんも昔からフラフラ男ばかりつくって、他人が幸せくれるとカン違いしてんねん！」

みさちゃん「何が悪いねん！」

3人、立ち上がる。鉄板のホットケーキ、こげている。3人、つかみあいにある。

なつみ「自分の力で幸せになつてみいや！」

みさちゃん「私がどんな思いで仕事してるんか分からんくせに！

東京行ったり嫁になつたりしててる女に分からん苦労してるんじゃ！」

きいちゃん「嫁には嫁の苦労があるんじゃ！」

なつみ「アンタはきいちゃんや！ 嫁やない！ 嫁つて考えるから不幸なんや！」

きいちゃん「不幸やと！ そうでもないぞコラ！」

なつみ「だつたら幸せつて言わんかい！」

3人、もみくちやに。テーブルに置いてあつたマネキンの頭、鉄板の上に転がる。煙を上げているホットケーキ。

みさちゃん「私らに勝手についてきて、いっつもオイシイ所だけもつてつて！」

なつみ「もつと気合い入れんかい！」

きいちゃん「幸せになりたい！」

なつみ「中途半端！」

みさちゃん「私の苦労ちよつとは分れ！」

きいちゃん「要はなつみがうらやましい！」

3人はそれぞれにパンチ（なつみ↓みさちゃん、みさちゃん↓きいちゃん、きいちゃん↓なつみ）。つまり、三つどもえのクロスカウンターである。

マネキンの頭、発火。3人、ボタンと倒れる。

炎がテーブルの紙皿に、残りの燃料に、のぼりに、パラソルに次々と伝わっていく。

3人、寝っ転がったまま大爆笑。

きいちゃん「もうどうでもええわ！」

なつみ「あー！ーきれいな炎」

屋上の錆びついた観覧車が、火柱のライティングを

受けて美しい。満天の星。

みさちゃん「あっ、はじめっ！」

赤ん坊（はじめ）はすやすや寝ている。

みさちゃん「(地上に気づき)やっばー！」

思いつきり、水が降ってくる。地上に集まる消防車の群れ。消火の放水が始まった。びしゃびしゃ。火は鎮火。

きいちゃん「逃げろ！」

酒とつまみをちやつかり持って、全員ダッシュ。

○階段

ダダダと登っていく消防士達。隠れていた3+1人、階段を下りていく。

○大丸デパート、裏口、深夜

裏口に停めてあった自転車で3+1人、一目散。

○国道、深夜

自転車を漕ぎながら。緊張が途切れ、大爆笑。

なつみ「なあ、このまま世界の端っこ見に行こう！」

きいちゃん「え？」

なつみ「海まで走ろう！」

○朝焼けの海

夜明けである。あのときと同じように、3人は海をみつめる。今度は違う気持ちで。

○教会

きいちゃんの結婚式。席についたなつみは、隣の人

に顔をじろじろみられる。昨日の青タンを絆創膏何枚もで隠しきれてない。

みさちゃん「アカンでなつみ。やるやったらビツとせな」

隣の席のみさちゃんは、無茶苦茶ファンデーションを厚塗りしてごまかしている。が、痣はバレてる。

なつみ「首と顔、色違うやんけ」

みさちゃん「あいつが一番大物や」

音楽とともに入場してきた新郎新婦。

新婦きいちゃんは、デーモン小暮並みに顔を白塗りにしてごまかしている。秘かに爆笑するなつみ、みさちゃん。それに気づいて子供みたいに笑うきいちゃん。

○教会の青空披露宴

司会「では友人代表で、浦川なつみさんにスピーチを」

なつみ「え、聞いてない」

新婦席のきいちゃん、ニコニコしている。なつみ、マイクをとる。

なつみ「えっと、何話そうかな」

きいちゃん「十八番の話！」

きいちゃん、みさちゃん、期待した目。

なつみ「……(咳払い)……お話を持って帰るのはタダです。にもつにならないし、いつでも思いだせる、べんりな一種の魔法かも知れないです。…よろしければ、聞いて下さい。

昔むかし、私たちが子供のころ、大丸の屋上には、幸せのホットケーキがありました。正確に言うと私がそう呼んでたんですけど。それはそれはあまーいあまーい、幸せの味。あつこの端からこっちの端からぐらいい、あまーい味」

周りの人達、想像している。なつみ勇気をもらおう。

なつみ「ケーキも二重ならバターも二重で、たっぷりハチミツがとろーりとかかって、えーえ匂いが風下3キロ。子供の頃、よくこの話をみんなにしました。

でもね、この話、実は私のつくり話なんです。本当は私、

大丸のホットケーキ食べた事ないんです」

驚くさいちゃん、みさちゃん。

なつみ「実はこの話には、続きがあるのです。幸せのホットケー

キは一人で食べてもおいしくないのです。一緒に食べる人がいて、はじめて幸せになれるのです。ホットケーキが幸せなんじゃなくて、一緒に食べる人が、幸せなんです」

新郎新婦、顔を見合わせる。みさちゃん、なつみ、

さいちゃん、目をあわせる。さいちゃんは涙を流して笑っている。

なつみ「幸せのホットケーキの話でした」

さいちゃん「なつちゃん最高や！ なつちゃん最高や！（拍手）」
みさちゃん「やるななつみ。また新しい話になった」

さいちゃんの号泣にもらい泣きするみんな。静かな拍手が、会場を包んでいく。

なつみ座る。と、そこはかつての美しい野原。さいちゃんもみさちゃんも拍手をしている。照れて微笑むなつみ。

○まんがのアップ

ウエディング姿のさいちゃん、ミニスカ衣装のなつみ、赤子を抱くみさちゃんが三つどもえのクロスカウンター。中央には炎をあげて燃えるホットケーキ。

コメント『幸せを奪いあう、私たちは親友』

○小さなエロ出版社、中、夕方

そのイラスト(ひとこままんが)を見た根津が笑う。

根津「ブツ。なんですかコレは」

なつみ「え、なんとなく描いてみました」

根津「コレ面白いね」

なつみ「ハイ。…え？」

○出版社の前の橋の上、夕方

出版社を呆然と出てきたなつみ。以下、出版社とカ
ットバック。

× × ×

根津「なんかね、はじめて君という人間が分かった気がする。

オリジナルだよ」

なつみ「(照れて) 半分つくり話なんですけど」

根津「ここにとあるエロ雑誌がある。最後のページ、ひとこま

まんがのスペース空いてるんだ。3日あげるから、なんか

描いてきてよ。そのつけるよ」

なつみ「え！！！」

× × ×

橋の上を、まだびっくりした表情で歩くなつみ。

× × ×

根津「カットマンが描くイラストよりかき、なんかこんなオハ

ナシのあるまんがを描けばいいんじゃない？」

× × ×

立ち止まるなつみ。興奮してくる。

なつみ「おはなし？ …その手があったか」

いつの間になつみの周りには、ダンプを連れ去る

UFO、ピーナッツの精、王女と奴隸、擬人化され

た花達がいる。自分の影はにわとりとカエルだ。幸

せのホットケーキが宙を舞う。

なつみ「話をつくるのなら、得意だぞ」

武者震いするなつみ。走り出す。フォーマル服のま

ま走り出す。

長いスカートが邪魔。裾をからげて(ミニスカート

のように) 走ってゆくなつみ。色んなキヤラもつい

てくる。

橋の上はきらめく夕日。なつみ、吠える。

○なつみの部屋

夜も昼も、どんな季節でも、なつみは描き続ける。

次々と描かれる独特のまんが達。

× ×

それは次々と雑誌の1ページになっていく。

× ×

なつみが描くと、野原のきいちゃん、みさちゃんが笑う。

○引越した真新しい部屋、夕方

まっさらの部屋に段ボール箱の山。その上に猫、陣取っている。新しい畳にねっころがるなつみ。

なつみ「こんどはふた部屋もある。へへへへ」

大きな段ボールを運んで和哉が入ってくる。

和哉「なつちゃんこれそこで？」

なつみ「うん。ありがとう手伝ってくれて」

和哉「そうだ、言ってたバイトの面接、さつき受かったってメール来てた」

なつみ「スゴイじゃん！」

和哉「なつみが絵で食ってたんだ。オレも負けてらんねえよ」

なつみ、座布団をTVの前に置く。和哉、座る。

なつみ「あの部屋にいたときは、毎日和哉が朝まで酒くさい私の愚痴を、聞いてくれた。気づかなかったんだよ、ありがとうだったんだなって。今度は和哉の愚痴を聞いてあげなきゃ」

和哉「別にいいよ(笑)。頭冷やしても、なつみといたい気持ちには冷えなかったよ(罪のない笑顔)」

なつみ、和哉の隣に座布団を置いて座る。

なつみ「この位置が、一番おちつく」

ふたり、やさしいキスをする。

なつみ「あ、でもね、今日だけは朝まで起きてて」

和哉「え、なんで？」

なつみ「(立ち上がる) 今日でやっとあの店ラストなの。送別会があるけど、絶対酔わずに帰ってくるから」

○クラブ「ベリーショート」内

根津、大声でなつみに気づく。

根津「あ、いたいたなつちゃん先生！ どうしてもウワサのミニスカ姿見ときたくて！ あ、写メ撮っていい？」

常連達に花をもらっているなつみ。席に座る根津。

なつみ「根津さん！」

根津「知り合いの編集者がさ、直々に会わせてくれつつうるせえから連れてきた。こちら白石さん」

根津に連れられてきたのは、あの女性編集者白石。

なつみ「…あっ」

白石「？ 以前お会いした事ありましたっけ」

なつみ「いえ、プロのまんが家としてははじめてです。（笑いが止まらなくなってくる）」

白石「ほんのひとこまですけど、独特のタッチが面白いと…どうかしました？」

なつみ「（笑いが止まらない）べつに、べつに。スイマセン。アハハ。アハハハハハ」

○小さな居酒屋、深夜

レイコの送別会をやった居酒屋。

杏子「では、なつみ、おつかれさーっーん！」

乾杯。杏子、なつみ、島田、渡辺、小野寺。店長

その他新人ミニスカ嬢も飲んでいる。

なつみ「ありがとうございます。お世話になりました」

杏子「結局3年もいたね。絶対スグ辞めちゃうと思ってたよ」

渡辺「これからなつちゃんの面白話聞こうと思ったら、まんが買わなきゃいけないのか」

なつみ「コンビニとかでは立ち読み出来ないのでご注意を」

島田「あ、そうだコレ」

UFO型のキーホルダー。「交通安全」のお守り。

島田「あの後仲間うちに話したらさ、長距離ドライバーの間に一時期UFOが都市伝説みたいに流行ってさ、いつのまに

かサービスエリアで誰か商売してやがんの。こんど金どりにいこうぜ」

なつみ「へー……」

小野寺「なつみの話が、めぐりめぐったって事かな」

渡辺「ピーナッツの精も商品化しないかな」

笑いあう常連達、杏子。

なつみN「毎年、春になると、東京には何万もの若者が、脇役から主役になるためにやってくる」

なつみ、立ち上がる。

なつみ「ではそろそろおいとまを」

杏子「ええもういっちゃんなの？ もっと飲もうよー」

なつみ「だってもう始発出てるし」

振りかえるなつみ。みんなベロベロに酔っている。

なつみ「では、おさきに」

一礼するなつみ。

○繁華街、夜明け

外へ出ると、もう夜明けの街は動きはじめている。

まぶしさに少しフラつくけど、すぐにちゃんと歩き

出すなつみ。今日の私服はミニスカート。堂々と歩

くなつみに、街のみんなが振りかえる。

なつみN「それから、私はまんがの仕事で少し成功した。つくり話をする相手が、どんどん増えた」

一陣の風がふく。堂々としたなつみは、美しい。